
カース

世良

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

カース

【Zコード】

N7177Z

【作者名】

世良

【あらすじ】

親友サチの亡くなつた横断歩道で男に出会つた。そして私は死んだ。

プロローグ1

サチが居なくなつた、サチは私の親友で、幼稚園のころからずっと仲が良かった。あまりに仲が良いので「まるで姉妹みたいね」なんてことを両親に言われたことがあるほどだ。同じ小学校を通り、同じ中学校にも通つた。小学校でも中学校でもこの友情は変わらない。

いつも一緒にやれる機会がある時ならいつでも。でも中学3年の春。本日、5月3日サチは居なくなつてしまつた。今でも信じられない。

昨日まで「また明日ね！」って言ったのに、明日になつても会うこと無かつた。居なくなつたのは下校途中で別れてすぐだつたと言つ話だ。いつも別れる場所から自転車で3分もかかる横断歩道。普段は車の通りも少なく、事故なんてほとんど起きない、そんな場所で亡くなつたらしい。

死因は知らない、教えてもらつていない。事故だったのか、それとも最近噂になつていた通り魔だつたのか。でも何もできなかつた自分が一番悔しい。もしもあの時、私が向こうに言つていれば助かつたかもしれないのに！

あの時、サチは体調が悪そうにしていたように感じた。もしかしたらそれが原因で何かあったのかも知れない。
だとしたら、私は、私は。

9月、夏が過ぎて木の葉の色が変わり始めて秋を感じさせる。今年の夏休みは夏季講習で潰れ、終わると学校。この秋を越え、冬が来ると受験が始まる。

憂鬱な気分のまま今日も学校へ。

「おはよー、亜美」

「おはよ」

友達の恵理が肩叩いて挨拶。私は出来る限りの声で返事した。

「元気ないねー、夏期講習のせい?」

「それもあるけど他にも色々」

「なんか大変そうだねー、あつ先生が来た」同時にチャイムが鳴る。もうサチがこの学校から居なくなつて4か月経つ。みんな受験勉強に忙しくて必死に勉強している。当然私も例外ではない。

夏休みに入る前は皆気にしていたけど今はその話題には誰も触れよつとはしない。皆忙しいのか、それとも忘れてしまつたのか。

最近変な夢を見るようになった。最初ははつきりとしなかつたんだけど、成績のことでの親との揉め始めてからそれが鮮明になつてきた気がする。その光景ではいつもサチと下校する時に別れる丁字路。私は右でサチは左。その左右の別れ道を左に少し進んだ所にある横断歩道の上をうろつうろするだけ。それ以上は何もない。一度誰かがここを通つて出会つた時、私の顔を見るなり逃げていつたような記憶がある。

今日下校ついでに行つてみよつかな。昨日まで夏期講習でそんな場合じやなかつたし。

退屈な授業、もう教科書の内容は終わつていてどの授業も復習ばかり。午後4時、下校時間になつたので適当に友達と別れの挨拶をして自転車を漕ぎ出した。

あそこだ、コンクリートの壁とアスファルトの道路に囲まれたこの道。目の前に左右に別れる道が現れてくる。

いつもは右に曲がるけど今日は左に曲がる。そこから少し進むと横断歩道が見えた。人通りは無く静か。聞こえるのは風の音くらいだ。

横断歩道を通つたそばに花束が置かれていた。一緒にお菓子やジュース置かれている。

親にはここで亡くなつたつてことは言われた。サチの両親にもそう言われた。でも詳しいことは教えてもらつていない。

自転車を傍に止め、しゃがんでボートとそれを見続ける。話によると事故としか教えてもらつていない。どのようなことがここで起つたのか、誰も教えてくれなかつた。

「お前は、甲本幸の知り合いか?」

後ろからいきなり男の声がした。全身がビクッとして鳥肌が立つ。息が苦しく、動悸が激しい。

ゆつくりと呼吸をしながら後ろを向くと見覚えのない男性が立て居た。灰色のコートを着た長身の男。凄く怪しい、そんな人。だけど彼はサチの名前を知っている。甲本幸、サチの名前を。何かを知つていてる? 大きく深呼吸をして息を整えて答えた。

「はい。そうです。同じ中学の友達です」

「中学、なるほど。そう言えば16時頃に終わると聞いていたな。ふむ」

口に手を当てながらじりじりと見てくる。明らかに何かを探つているのが見てとれた。

「何か?」

「いや、最近変な夢を見なかつたか?」

「変な、ですか。どんな夢ですか?」

夢、確かに見たけどすぐには答えなかつた。見た目のせいか、明らかに怪しくて信じられなかつたからだと思う。

「……いや、何でもない。変なことを聞いてしまつたな」

一礼して帰つて行つた。何だつたんだろう、あの人は。

プロローグ2

またこの夢だ。まるで古い映画のようになoisズの入った映像。見えるのは暗い道路と足元には白い線。

私は何をしているんだろう。こんな所を歩いて、何を。

突然映画で聞いたことのあるような銃声が、凄い音で全身に痺れとひどい頭痛が走った。目の前に白線が田の前に飛び込んでくる。どうやらこけたらしい、立ち上がるひとつ手を使う、そして足で地面を踏もうとしたが出来なかつた。

なぜか分からずそちらに視線を向けると右足が無くなっていた。そこに痛みは無い、代わりに頭痛が針で刺すように痛む。

地面を這いずりながら動いていると足音が近づいているのが分かつた。近づくにつれて恐怖心が募つて体動かせなくなつた。唯一動かせる首をゆっくりと動かして後ろを見る。

あんたは、わっしの

「キャーっ？！ はあ、はあ。今の、なに？」

今、撃たれた。地面を引きずりながら動いている私に向けて、頭に銃口を。それよりもその相手が、何者？

現在午前3時、吐き出しそうなほど心音が激しく鼓動している。数分、深呼吸を続ける。落ちついてきたけど代わりに喉が渴いていふことが分かつてきた。音を立てないように静かに台所へ向かい、コップに水を汲む。

「……う、ん。ふう、さて寝よう」

喉が潤うと気分が少し落ちついた。欠伸を漏らしながら部屋に向かつてベッドに潜り込んだ。しかし横になるとさつきの映像が頭の中に流れた。おかげで心音が高鳴る。全然気持ちが落ちつかない。眠れない。

その日は明かりを付けて布団に潜り込んだままで夜が明けてしまった。

「いつものよひに学校。気分はいつもよりも悪い。とりあえず、眠い。」

行くのが嫌で母さんに黙々をこねてみたけど「受験が近いんだから行きなさい！」と怒鳴られたのでもうがなく通学した。学校に着いてからも凄く体がだるくて、持つている鞄がいつもより重く感じて辛い。

「おはよー、亜美」

「おはよ」
「いつものよひに恵理が肩叩いて挨拶。昨日よりも低い声で返事した。

「なんか今日は昨日よりもひどいねー」

「うーん、色々あってね」

「ま、まあ調子崩したら言ひてねー？」

戸惑いながら恵美は言つと離れて行った。

眠たい、けど寝たらまたあの映像が襲つて来そうで眠れない。けど体調は良くない、休むように机に顔を突つ伏せた。

それから前と同じように復習や対策ばかりの授業。自習もそこそこあつたが特に何かするわけでもなくただ寝たふりをしていただけだつた。

そんな調子ですつと鬱々として過ごす。気がけば下校時間、今日学校で何してたんだろ？

前かごに鞄を乗せて漕ぎ出す、数分こぎ続けるとあの一字路まで来てしまった。

さて、どうしようか。

嫌な予感しかしないのに、でも昨日の夢の「」とが眞になってしまふがない。

丁字路を左へ曲がって奥へ、横断歩道が見えてきた。それと一緒に見たことのあるコート姿の男が立っている。男を見ると同時に夢の映像が流れた。

やばい、怖い。もしかして私を待っていたの？

ブレーキを引き、反転する。向こうはこちらに向づいて走ってきてるのが一瞬見えた。私は田一杯ペダルに体重をかけて無我夢中でじき出す。

立ちこぎで、今まで出したことのないような速度で道を駆け抜ける。ある程度走つて所で後ろを見たが姿は無かつた。

逃げ、された？

肩で息をしながら確かめるように自問自答する。

良かつた、もう追つてきて居ない、なんて安心している場合じやなかつた。

気づいた時には遅かつた。田の前に信号待ちをしている車が、ブレーキを握るが間に合わない。結局、抵抗むなし激突した。

「い、いたつ」

ぶつかると体が一瞬前に飛ばされそうになり、鼻や口から何かが飛び出そうな感覚がした。幸いブレーキのおかげで少し失速してこける程度で済んだ。こけた時に右腕を擦ったみたいでそこが少し破けていた。

「おつおい大丈夫か？」

優しそうな初老の男が車から出てきてこちらの心配をしている。自転車は前輪が走ることが出来ないことが分かるくらいに曲がっていた。向こうの車はタイヤの形に少しへこんでいる。

「あっ、はい。だ、大丈夫です」

「そ、うか、良かつた。でもこれは……ひどいねえ」

自転車とぶつかった跡を交互に見ながら言つ。

「す、すいません！ 急いでて、それで」

「とりあえず電話番号を」

男がそう言いながら車の中へ入っていく。車のアイドリング音だけだったはずなのに、後ろからやけに響く靴音が、まさかと思って後ろを向くとコートの男が近くまで来ていた。

「キヤーっ！」

思わず声を上げる、そして立ち上がり無我夢中で走り出す。

「ちょ、ちょっと、待ちなさい…」

「行くな！ まだそつちは」

二人の男の止める声が聞こえる。

止まれるものか、止まつたら殺される。でも、叫び声は私が思っていたのと違った意味を含んでいたことに気づかなかつた。

ぶつかつた車の横を走り抜け、そのまま道路へ。同時に左の方から大きな音がする。この音つて

私は死んだ

気づくと横になっていた。ベッドの上で、傍にはコートの男が立つていてこちらを見ている。男に気づくと同時にビクッとさせて襲われないように腕を縮ませていると「起きたか」と、言つと男の声と同時に傍で軋む音が聞こえた。

腕を下ろし、腰を上げて男と同じようにベッドに座りこの場所を。前を見れば男が見えて、その後ろには入口だと思う扉がある。上を見れば綺麗な照明、左に視線を向けると枕と傍に小さな照明、反対側には机と鏡、その隣にはテレビがあった。誰かの部屋と言つよりはホテルの一室と言う感じ。

「ここは、どこ?」

「すまなかつた、私のせいだ」

男は質問に答えることなく謝り続ける。意味が分からず聞くと説明を始めた。

「17時24分に亡くなった。信号無視で」

そこから先の内容は頭に入つてこなかつた。代わりにここに来る直前のこと我が頭の中を渦巻いてくる。

この男から逃げようとして無我夢中で走つた先。あそこは信号のある交差点で、直前に見たのはいつもと感じが違う大きなトラック。遠目で見る時は何も感じなかつたのに、今想像できるのは強大で凶悪な別の何かで……

「おい、大丈夫か」

肩の揺らされる感覚と男の声で現実に戻された。同時に今の私が現実でどうなつたのか、この男が言つてることが本当だったと言うことも。

「とりあえずしばらく休んでおけ。お前が今どうなつているのかは追々説明する」

男の声に力なく頷いた。

私は今『ホテル松尾』というビジネスホテルの一室で男と居る。男の名前はマキシムといつそうだ。名前からして多分外人、だけど喋る言葉に違和感は無い。

「何か聞きたいことはあるか?」名前と今居る場所を教えてもらつと聞いてくる。

聞きたいこと、正直、今は何もやる気がでない。いきなり死んだと告げられて、気分が上がる人なんていないか。

「何にもない」

気分が悪い時に出る低い声で答えておいた。

「明日、外に出るがどこに行きたい所はあるか? 無ければ仕事場にいくが」

「考えとく」と、さつきと同じ声で、何も考えず答える。

時刻は午後11時。いつもならそろそろ寝ようかと考える時間。でもあまり眠気は襲つてこない。私はつまらないニュースを見て、男はざつと銃をいじつていた。その銃には見覚えがある。夢の中で撃つた銃。何をしているか分からぬけど、多分整備をしているのだと思う。

「ねえ、夢でその銃で撃たれるのを見たんだけど。何だつたの?」小さな金属音を立てながら銃をいじつっていた手を休め、喋り始めた。

「それはお前のカースの映像だ」

「カース?」

「そうだ。呪い、と言えば少しだけ分かりやすいかも知れないな」

「呪いつてホラー映画とかにある、呪い?」

何度かテレビで放映されていて映画で見たことがある。その人を恨み、恨まれた人は様々な不幸に遭つて、死んだりすることが多かつた気がする。

「そうだな。まれにいるんだ、呪いを持つ人が。私たちはそれを倒し、そしてそれについて研究することを仕事としている」

「研究しているのに倒すの？」

「元となつた人と出会うと、恐ろしい事が起ころるからな。倒した後は元となつた人を連れていくのが主な仕事だったんだが、な」
言いにくそうに語尾を濁す。困ったように男は半笑いになつていた。私もつられて半笑い。だつてこの話が本当なら私は殺されたんじゃなくて……

私は顔に手を当てて屈んだ。恥ずかしいのもあるし、あほらしくて笑つてしまいそうな自分もある。状況を飲み込みたくない自分がここにいることだけは理解した。ベッドにもぐりこんでいると小さな金属音が再び聞こえる。他に何も音は聞こえなかつた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7177z/>

カース

2012年1月5日18時46分発行